

学工学部情報工学科の三好教授の協力の下、広島と東京間での衛星利用遠隔講義を行い、その評価と今後の課題について検討した。遠隔授業は、事前に広島から茨城にある NOC (Network Operations Center) に送られたマルチメディア教材を、広島の講義担当者が操作し、東京の教室に映し出

された教材を受講生が見ながら講義を聴く方式で実施した。受信は家庭用のパラボラアンテナで可能であり、視聴覚設備を備えた通常の教室で十分講義を聴くことが出来た。今回用いた経済的なシステムでも授業評価は普通の授業に遜色なく、講義形式の授業であれば問題がないことが実証された。

---

## 「保育」の在り方を問い直す(2) —— 保育実践と介護実践の比較検討を中心にして ——

師 岡 章

本研究は、従来、教育の一環として捉えられてきた「保育」概念を、対人援助を旨とする行為から再検討し、その営みの今日的な意義を見出すことを目的とした。特に、当該研究年度は、保育実践の援助論的分析、及び対人援助を旨とする行為のひとつである「介護」概念との共通点・相違点等について検討した。その成果は、概ね以下の通りである。

- 1) 保育実践を具体的な保育者－子ども関係を中心に考察する中、小学校以上の学校教育に見られる「教授－学習関係」とは異なる関係が見られることが確認できた。特に、子どもの側に立ち、その興味・関心を最大限活かそうとする保育者には、子どもから学び、自らのあり方も見直す営みが内包されていることも明らかとなった。
- 2) 介護実践が社会的弱者への慈善的行為ではなく、利用者を1人の人間として尊重し、その存在を共感的理解のもと受け止めていく行

為であることがわかった。したがって、介護が老人の自立支援である限り、介護者－利用者の関係も、「介護する－される」の一方方向的なものではなく、相互的なものであることと言える。

- 3) 結果、保育と介護は、ともに対象者の自立に向けての援助であり、保育並びに介護者と対象者との関係が相互的であることがわかった。そして、互いの行為の本質が「ケアリング」にあることも明らかとなった。今後は、「ケアリング」という教育あるいは医療行為とも異なる営みとして保育行為を捉え直すことが、子ども主体の実践を志向する上で重要となる。ただ保育、特に園レベルの保育は1対1関係で進められる介護とは異なり、集団を前提に営まれる。今後は、この点も加味して考察を進めることが求められる。次年度以降の研究につなげたいと思う。